Policy Topics

「野生動物と共存する牧畜民マサイ」～学部研究会講演会の梗概～[1]

The Pastoral Masai ~ Coexisting with Wild Animals in Africa ~

神戸　俊平[2]
Kambe Shumpei

目次

１．プロフィール
２．獣医師活動
　２－1．ツェツェバエ被害防止
　２－2．家畜診療
　２－3．野生動物保護と密猟防止
３．啓発活動
　３－1．自然環境保護（ナクル湖自然環境調査、水力発電事業調査）
　３－2．フェアトレード促進（民芸品販売事業）
　３－3．スタディツアー（サバンナゼミ）
　３－4．講演・メディア出演活動

１．プロフィール

私、神戸俊平は、1946年東京で生まれ育ちました。1971年にアフリカ大陸に旅立って以来、人生の多くをアフリカ・ケニア国で過ごしてきました。

日本大学・獣医学部に入学し1969年に卒業しましたが、当時は全国的に大学生による政治的な運動が盛んな時期であり、あまり熱心に通学しませんでした。でも、獣医師の資格は取得しました。卒業後は福島県・酪農協同組合で、獣医師として勤務し、主に乳牛の診療に当たりました。その後、アフリカで野生動物のための仕事がしたい、獣医活動がしたいという子供の頃からの願いをかなえようとアフリカ大陸に旅立ちました。当初は2週間の予定だったのですが、バックパッカーとして約2年間の放浪生活をおくることになりました。

ケニア野生動物公社（KWS）の施設であるナイロビの動物孤児院との関係から、私はKWSの活動にボランティアとしてたずさわり経験を積みました。また、ケニアでは日本の獣医師免許が効力を持たないので、ケニア国内で獣医師活動をすることができません。ケニアで獣医師になる必要があります。そこで、私はナイロビ大学大学院獣医学科の修士課程への入学を目指しました。

幸い、ナイロビ市内の日本食レストランで出会った親切なアメリカ人男性の方から学費の援助を受けることができ、入学試験にも合格しました。大学院には欧米から著名な先生が来て有意義な授業を受けることができました。修士論文『手術前後の細菌感染について』（英文）を書く時にはとても苦労しましたが、親切なジャーナリストの助けを借りて無事に修士課程を修了することができました。その結果、日本人として初めてケニア獣医師となりナイロビ市内で開業しました。

２．獣医師活動

２－1．ツェツェバエ被害防止

アフリカ・サハラ砂漠以南の砂漠地域には2000万人近い牧畜民族の人びとが暮らしており、その中でも牧畜民マサイがよく知られています。彼ら

1　本稿は、2018年10月19日に開催された学部研究会講演会の講演録と「神戸俊平友の会」ホームページの内容を参考に、本学部教授・今井一郎により作成された。
2　獣医師（ケニア・ナイロビ在住）Veterinary Surgeon

の生活の糧はウシです。アフリカ牧畜民族の暮らしの多くの局面には必ずウシが登場し、ウシがいなければ生活が成り立ちません。ウシは、食糧（ミルク、肉、血）、運搬手段、物品との交換、婚資（婚姻時に新郎側から新婦側に贈られる家畜などの財産）として不可欠です。マサイの宝と言われる牛たちが、ツェツェバエの被害に遭っているのです。

ツェツェバエに刺されるとトリパノソーマという原生動物（寄生虫）に感染し、「ナガナ病」や「眠り病」が発病します。私は、この被害を食い止めるためにケニア・ナロク州のマジモト村で、「トラップ法」による被害防止活動を実施しています。「トラップ法」は、自然環境を大きく破壊せずにツェツェバエ被害を防止する方策です。

2－2. 家畜診療

私は、ケニア南部のマサイマラ動物保護区に近接する地域でマサイの人びとが飼っている家畜診療を実施しています。この地域では、ツェツェバエやダニによる被害のほかに、日本に侵入すれば国内の畜産業が大きな打撃を受けると言われる口蹄疫も定期的に流行しています。私は、これらの病疫を防ぐためウシに予防接種したり定期的な家畜の診療を実施しています。

2－3. 野生動物保護と密猟防止

マサイの家畜診療をする地域はマサイマラ動物保護区に隣接しており、世界的に有名な保護区です。そこは、タンザニア・セレンゲッティ国立公園から毎年100万頭ものヌー（ウシカモシカ）が季節的に大移動してくることで有名です。密猟が多く、私はワナの撤去や傷ついた野生動物の保護活動に携わっています。ケニアでは、野生動物の保護管理はKWS（ケニア野生動物公社）が行なっていますが、私たちはKWSや州のレンジャーたちと協力して活動しています。

象牙の取引はワシントン条約で禁止されています。しかし、ケニアでは象牙を目的としたアフリカゾウの密猟が絶えません。外国で象牙が高価で取引されるからです。日本でも象牙製印鑑の使用が好まれます。ゾウを殺して象牙を奪い取るのは密猟者たちです。そのためにアフリカゾウの個体数が激減した地域があるのです。

私は、NGO組織「神戸俊平友の会」の代表を務めていますが、当組織は以前からCITES（ワシントン条約：Convention on International Trade in Endangered Species of Wild Fauna and Flora）の会議に隔年で参加し、象牙取引に反対してきました。私たちが象牙を買わなければ需要が減って価格が下がり、ゾウの密猟も減少するはずです。そのために、CITESの条項を充実し順守させる必要があり、当組織はCITES会議での提言を続けてきたのです。

私が代表を務めるNGOが中心となって、ゾウを密猟から守るために移送させたこともあります。まず麻酔銃でゾウを撃ち、倒れたゾウをコンテナに入れて移動させたのです。ケニア山西部の密猟が頻発する地域から、約200キロメートル離れた安全な国立公園まで50頭以上のゾウを移送することができました。この移送作戦の模様は、日本国内のテレビで放映されたことがあります。

（TBS系列「夢の扉」～野生の王国ケニア・アフリカゾウを救う日本人獣医～
http://www.tbs.co.jp/yumetobi/backnumber/20061105.html）

3．啓発活動

私は、地域住民に対して野生動物との持続的共存のための啓発活動も続けています。多くの開発途上国では、日本のODA（政府開発援助）による様々な案件調査、事業が進められています。これらの援助が日本に伝えられる際には、「プラスの面」だけがクローズアップされることが多いようです。しかし、実際には無軌道な開発行為によっ

て環境が破壊され、野生動物の生息域が失われる場合があるのです。

3−1. 自然環境保護（ナクル湖自然環境調査、水力発電事業調査）

ケニア国の中央部に位置するナクル湖は、湖から流れ出す河川の無い湖沼です。湖水の蒸発によって水質は強アルカリ性になり、3種の藻類が増殖しています。それらの藻類がフラミンゴの主な餌となり、その数は100万羽にも及ぶ特異な生態系が維持されてきました。1986年に、ナクル湖に注ぐ川に日本の円借款による取水ダムが建設され、ダムの排水による水質変化が生態系の破壊を引き起こす恐れが懸念されています。フラミンゴの大量死がもたらされるかもしれないのです。当組織は、ケニアのナイロビ博物館の主催で年2回実施されるナクル湖水鳥数調査に参加して、適切なODA活動が実施されるように提言・啓発活動を続けています。

ケニアとウガンダの国境に位置するビクトリア湖に注ぐソンドゥ・ミリウ川で進められている水力発電事業にも問題が指摘されています。ソンドゥ・ミリウ川の上流部に建設された発電用のダムにより、下流域に水が十分行きわたらず住民生活や自然環境に悪影響が出ているのです。これもODAによって進められている事業ですが、事業が実施された後の状況についての情報発信は十分とは言えません。当NGOでは、この種の情報を収集し、内外への発信に努めています。

3−2. フェアトレード促進（民芸品販売事業）

私自身は毎年春と秋に日本に帰国して、様々なイベントに参加しています。各地で開催される国際協力フェスティバル等にテント出展し、ケニアから持ち帰った手作りのアクセサリーや衣服を販売して、利益をケニアの生産者たちに還元しています。日本では、アフリカの女性が身にまとう「カンガ」という布地や、指輪、ネックレス、カラフルな腕輪などが好まれます。

3−3. スタディツアー（サバンナゼミ）

獣医師やNGOスタッフとしてアフリカ大陸で活動してきた人間、神戸俊平の視点から、真のアフリカの姿をお伝えするのが「サバンナゼミ」というスタディツアーです。このゼミでは、サバンナで繰り広げられる野生動物の営み、牧畜民族マサイの生活、アフリカ大陸の貧困問題などについて実態を見つめつつ学びます。これまでに、獣医学部の学生から神戸俊平（1946年生まれ）と同世代の方がたまで、さまざまな背景を持った方がたが参加してくださいました。

スタディツアーでは、全ての行程に神戸俊平が同行してテントと寝袋で生活します。日本ODAの現地状況を間近に見聞し、先住民族マサイと交流し、都市のスラムで暮らす子供たちと一緒に遊ぶ、約10日間のツアーです。ただ、最近はケニア国内の政治情勢や治安状況の不安定さなどの事情により、この種のツアーの実施は一時中断しています。

3−4. 講演・メディア出演活動

日本への帰国時には、小学校から大学までさまざまな教育機関において講演活動しています。現地で撮影したスナップ、映像などを用いてお話しています。

また、テレビや雑誌などマスコミは広い範囲の人びとに告知出来ますから、取材の依頼があれば出来るだけお引き受けするようにしています。

以上申し上げましたように、私は多くの方がたにアフリカの現状を知って頂き、少しずつでも諸問題を改善していければ、と願っています。